

地味な

グッバイ

伊藤佑弥

屋上には誰もいないし何もいない。風が運るものなく僕に直接当たり、風がある日はいつも寒い。風の音がさびしく聞こえる。右手の遠くに高い建物が見えるのと左には何も無い。今ドアを背にして寄りかかっているからそれをもう少し左に移動すれば中庭が見えて、うちの学年の教室が見える。何組の教室までかはわからない。多分自分の組ではない。今頃、昼御飯をみんな仲良さげに食べているだろう。昼休みには教室の方は見に行けない。すぐに誰かいるとバレてしまう。当然、屋上には入ってはいけない。いつも鍵が閉まっている。でも僕はその合鍵を持っている。ポケットの中にもいつも入っている。ポケットに手を入れ鍵に触れる。指で感触を確かめる。これが僕の世界への鍵。屋上に入れば太陽の光が僕に差す。新しい気分になれる唯一の場所。僕の聖域。

太ももに振動。かすかに音も聞こえた。

メールが来た。メールのやり取りだけの彼女から。いわゆるメルカノから。

『青春漫画で屋上がよく出てくる理由はなんなんだ？』

そんなメールを受信し、じつと携帯を見つめる。意味がわからない。なぜぞなのか。もしかしてさっき今日も屋上にいるとメールしたから、屋上にまつわるなぞなぞを出したのかもしれない。

返信を考える。考えてもわからない。だから、そのまま返信をしようと思っただけ、なんとなく青春っぽいからと返信をした。

見なくてもわかる彼女からの返信。僕らは一日に何十通もやり取りをしている。僕の4個上で今大学2年生の彼女は授業が暇らしい。授業中以外は極力返信するようにしている。楽しい。内容なんてないようなメールの数々なのに。明日には忘れてしまうことばかりの言葉。そして川に流れるペットボトルのようなやりとり。不手なはずなのに楽しい。会ったことないのに付き合えるのだろうか。僕は付き合いたいと思っただろうか。わからないが、楽しいのでそのままわかってほしい。わかってしまったらどうしようもない。会いに行つてどうする。付き合えるのか。僕が彼女を知らないように彼女も僕を知らない。呼吸するようにメールをしているのに。

またアキと名前の書かれたメールがまた送られてきた。

『まだ屋上にいるの？』

又チヌマチニチヌチとボタンを押して返信をする。思考と同じスピードで文字を入力していく。

返信。まだ屋上にいる。これから授業。

しばらく待ったが答えがなかった。ふと思う、なんで屋上にいるのだろう。屋上にいる理由。わからない。屋上には何も無い。上に空があるだけ。なのに僕はここにいます。

メールが来たのと同時にチャイムが鳴った。僕は寄りかかっていたドアからペリペリと体を剥がして立ち上がる。ドアノブの鍵をがちやりと回してドアを開ける。明るいから暗いへ移動。屋上に入る踊り場は暗い。上に電気すら付いていない。そして、倉庫のようにも使っているらしく、机が重ねてある。机の脚が上に向きまると半屋にも思えてくる。そんなことを考えながら持っている合鍵で屋上のドアの鍵を閉める。これだけは忘れないようにしないと。ここは僕だけの場所。ドアノブを回して鍵がちやんとかかっていることを確認して階段を下りていく。上履きがスリッパだから、そんなスピードを出せないように降る。もう先生が来たかもしれない。ああ遅刻は嫌だな。でもまあいいやトイレとか行って無理やり理由を作ろう。というわけでメールを見る。

『じゅぎょーわたしきょーも授業サボってる、だめだー。こうなっちゃだめだよ、しん君は』

階段を降り切ったところで返信を考える。なんて書こう。久々にメールで名前を呼ばれて笑みがこぼれる。目の前に女子がいた。気付かなかった。にやにやしているのを見られたかもしれない。気持ち悪い奴だと思われてしまう。目が合った。誰かも知らない女子。なんとなく暗そうに見える子だ。目に光りがない。まあ人のことも言えないけど。スリッパの色を見る。同じ色だから同級生だ。スリッパがポロポロで僕と同じ緑色のはずなのに黒く汚れている。女子ってこういうところあんまり気にしないよな。

あ、アキに送るメールのネタできた。スリッパが汚い女子がいた、アキはそーゆーの気にしてた？みたいなメールを送ろう。女子は小走りで僕のクラスとは反対方向へ行った。まるで、僕から逃げるようだったのでもちよっとだけ落ち込む。その後ろ姿を見送って、僕は自分のクラスへ向かう。どこかのクラスの人だろ、見たことがない人だ。歩きながら返信を打つ。

返信。今から授業いってくるー。さっき目の前に汚れたスリッパ女子が笑。アキはそういうの気にするん？

教室に入る前に携帯をサイレントモードにする。振動でも先生にバレてしまう。案外振動音は響く。まだ先生は来ていなかった。ラッキー。僕は何も言わず席に座る。すると同時に先生が来て授業が始まった。

僕とアキはまだ出会っていない。メールはしている。メールの中だけの付き合いだ。しかし顔も声も知っているが、会って話したことはない。電話もそこまですらない。メールだけの付き合い。しかし会話するように僕らはメールをしている。それが話ではないことくらい知っている。なんでアキのことを好きになったのだろう。コミュニケーションとも言えないコミュニケーションで。わからない。気付いたら好きだった。いや好きなのかな。わからない。会ったこともないし。そしたら自動返信してくれるパソコンのソフトでも好きになるかもしれない。でも僕はアキが好きだ。なんでだろう。考えるとわからなくなる。だからもう会ったら考えることにしている。でも好きなのは好きのまま。

授業が全部終わって、屋上に行く。階段を2段飛ばしで上り急ぐ。がちやりと鍵を回しドアを開ける。勢いよく流れてくる風が僕に当たる。今日も良い天気。僕はドアを開けてドアに寄りかかる。目の前には誰もいない。何もなし。グラウンドの方から部活動の音が聞こえる。中庭からは放課後の生徒の声。聞こえる音は学校なのにここには何もない。普段から鍵がかけてられているから、自殺しようとする奴も出ないので構もない。簡単に自殺できるよなーって思いつつ、今見ている光景を写メする。ぱしゃり、と音が鳴り保存する。そしてアキにメールを送る。

返信。何にもない屋上。今日もしばらくいるつもり

こんなトイレの落書きにもならないメールをアキは返信してくれる。そしてまた会話のようにメールが続くはずなのだけれど、今日は返信がすぐ来なかった。何かをやっているのだろう。大学の授業中かもしれない。

僕が大学に入った時にはアキは4年か。ギリギリ被ってはいる。アキに大学名聞いてその大学を受験しようかな。それもいいな。頭が良いところだったら大変だよな。でも頭良さそうに大学だろうな、アキ頭良いし。そしたらアキに勉強を教えてもらえばいいのか。それ名案だ。僕も頭が良い。頭が良いから、アキから返信がきた。関係ないけど。

『屋上だ。いいな、高校時代はいいことないや。これから授業いってってくる☆』

返信。いってら。屋上は案外寒い笑

『寒いんだ笑。いってきます。かせひくなよー』

返信。バカだからひかないよー笑

携帯を閉じる。パカと音が鳴る。大学の授業は90分だから、もう90分返信は来ないと判断。携帯を制服のポケットに入れる。そして空を見る。なんとなく青春っぽい。この僕を告げた屋上としての風景が。ああ、だから青春漫画では屋上が使われるのかもしれない。屋上に何もなくてそれが青く制服が黒い、このコントラストが青春っぽさを出しているのかもしれない。よく空を見ると雲がゆっくりと流れてゆく。平和だ。好きな人もいるし、好きな人と仲良くできているし、ああ平和だ。本当にどっかの国では戦争が起きているのかなあ。そんなことを思う。考える。

ドン！がちゃがちゃがたたたた
え？戦争？なに。

びっくりすぎて声でなかった。でもそれが好都合。声を出してしまつたらここに僕がいることがばれてしまう。冷静になるため息を整え、ドアノブを見つめる。生きているみたいに左右に動くドアノブ。鍵はかけているから開くことはないけど、信用できない。ドアが開くかもしれないとずつと見つめる。少し待つとドアノブが動きをやめた。先生ではなかったみたいだ。先生なら鍵を持っているはず。ああ怖かった。なんだつたんだろう。もしかしたら屋上に行こうとした生徒がいたのかもしれない。

携帯で時間を見て、5分くらい経つたのでドアをゆっくりと開けてみる。見るが誰もいない。なのでこの隙を見て屋上から出ることにした。また来たら、出るタイミングすらなくなってしまうかもしれない。

「ふー」

学校の中に入ってドアに寄りかかり座る。息を何回も吐いて落ち着こうとする。そして忘れずにドアの鍵をかける。開けようとしたのは不良かな。ヤンキーかな。煙草とか吸いに来たのかな。そういえばこの前先生が言っていた、トイレで吸い殻が見つかったつて。トイレが無理なら屋上と言っとか。ああヤンキーか。開け方もそういえば乱暴だったし。僕のオアシスもなくなるのか。やだな。じゃあ今座っているこの踊り場に不良とかヤンキーが来るかもしれないのか。踊り場を見まわす。たぶん5人6人は簡単に座ることができる。たまり場に最適かもしれない。

地面に針金が落ちていた。なにこれと拾い観察。ぐねぐねと触る。案外固い。あ、なんとなくピッキングのやつみたいだ。見たことないけど、イメージはこういう針金のようなものだ。鍵穴に入れてみる。入った。やみくもに動かすけど、全く開きそうにない。なんかコツがあるのかな。ガチャガチャと回す。開かない。もしかしたら不良たちはさっきこれをしていたのかもしれない。開くことがあるのだろうか。開いたら怖いな。

「あの、」

え？声が聞こえ、動きを止める。なんで声をかけられるんだ。不良？いや聞こえたのは女の声。

「え？」

「それ私の」

声の方を向けば女子だった。しかもちよつと前に見たスリッパの汚れた女子だ。彼女は僕の持っている針金のようなピッキングの道具らしきものを見つめている。

「あ、これ？」

針金を掲げる。彼女の視線がそれを追っている。

「ああーごめん」

針金を渡してすぐに階段を降りて帰ろうとした。

「あの、屋上、入りたい、入りますか？」

いや僕自由に入れるし、と言おうと思っただけ言ったら、自由に屋上に入れなくなるので言わず、
「いやなんとなく」

とだけ言って早歩きをして通りすぎる。早く帰ろう。

早足で学校を出る。慌てて靴に履き替える。変な奴出た。変な奴出たよ。怖いなあもう。あ、ということはスリッパ汚い女か。気付く。屋上のドアを明けようとしたのは。そうかそうか。あー怖い。携帯を開く。新着メールが来ていた。気付いていなかった。不覚。20分も前に来ていたメール。もちろんアキ。

『授業終わったぜい、今から帰宅だぜい』

返信、しようと思っただけ返信していいかすぐに思いつかないので、さっきあった出来事を長々書いて返信する。すると即返信。早いな。

『文章長つ笑。怖いね、もしかしてしん君のこと好きなんかもよ？ ストーカー的なの？』

えええ。好かれてるのか、学校で何もしてないのに。モテるようなことしてないし。でもなんか陰で見ました的な感じか。いや違うな。多分屋上に入りたけなのだと思う。ちゃんとこの文章読んでくれたのかな、アキ。怖い体験を共有したかったのに。だから長々頭張って書いたのに。まあ僕の文章力がないからかもしれないけど。そして僕はアキに返信をしなかった。理由はわからないがそれは初めてのことに。

今日はいつとも違い恐る恐る屋上に向かう。階段を昇る。足音を立てないようにゆっくりと。人の気配を感じたらすぐにでもその相手に気付かれず帰れるように。すると昨日のスリッパが汚れている女子がドアの前に腰かけていた。しかもびしょ濡れで、少なくとも今日は晴れで、雨は降ってない。なんでびしょ濡れなんだろ。女子を凝視してしまう。髪の毛が水を含み前に垂れて顔を隠して、表情は見えない。これ以上見つめていたら変に思われてしまう。よし帰ろうと後ろを向こうとしたら女子の顔が動いた。

「あ」

気付かれたと思わず出た。しかし気付いていなかったらしく、その声で女子は僕に気づき、慌てたように立ち上がり階段を駆け降りてしまった。僕は階段の途中で立ち止まったまま。なんなんだったのだろう。彼女がいたところは怪談話のオチのように濡れていただけだった。階段で怪談とちよつとおもしろいことを思いついたのではないかと思っただけアキには言わないでおく、面白おかしく文章にできない。

また短い文章で、適当に返信が来るだけだ。やっぱりメールだけのコミュニケーションは難しい。でもメールは送ってしまう。ファミレスでの会話のようなメールを。それが心地よい。楽しい。うれしい。

今日屋上に入るのにはやめようか。ドアの前まで行って迷う。開けるところをさっきの女子に見られたりしたら面倒だ。しかも外からじゃ中にいるかどうかかわかんし。

ドアの前に座ろうとしたら濡れた生徒証を見つける。名前と顔写真を確認。顔はさっきまでいた女子で名前は小林あかり。名前を見ても覚えがない人だ。同じクラスになったことないよなあ。たぶん。去年も今年も。誰だろ。いやさっきまでいた女子なんだけども、届けるのが面倒だな。面倒すぎて、ここに置いときたい。見なかったことにしたい。でも見つけちゃった以上渡さないと心に残る。

メールを送る。もちろんアキに。

返信。ねえ、生徒証見つけたんだけど届けた方がいいかな

返信をドアの前に座って待つ。帰ろうかな、と思っただけ来た。

『渡してあげたほうがいいんじゃない？好感度あがるよ！』

よし渡そう。決めた。好感度はアキの好感度もあがるのかなあ。だとしたらそれは嬉しい。階段を降りて教室を探す。わかるのは顔と名前と学年。あれ結構知っているな。なのに知らない。どんな人かもわからない。写真と何回か見た印象だと大人しそうな人なイメージだ。でも証明写真だからかもしれない。同級生なのに印象にない。同じクラスになったことないよな。2年の教室がある廊下でキヨロキヨロしながら探す。廊下を歩くと、放課後のせいか人が少ない。いない。廊下ですれ違ったらすぐに解決して楽なのに。大人しそうな子だし、放課後に残ってないのか。

「お、しんやじゃん」

後ろから呼ばれた。同じクラスの太田保がいた。髪の毛が茶色だ。不良。

「おお、なにしてんの??」

「俺？部活。しんやは？」

「ああ、なあまあなんとなく、なあなあ、小林あかりって知ってる??」

何故か急に笑い始めた太田保。え、変なことなの、言っちゃいけないことなの。ウチの高校のタブー？七不思議的な？

「逆に知らんの？」

「うん、知らない」

「マジかよ。あれだよ、上原にイジメられてる奴だよ、小林って」

「え、うちの学校イジメがあんの？」

「そこまで知らんの？有名じゃん」

「そっなの？」

顔くと、どこかへ案内される。イジメの現場だったら怖い。何をしたらいいかわからないし、どんな顔をしていいかわからなくなる。

「現場？」

「ちげえよ」

4組の教室の前に着く。同じ作りの教室のはずなのに、全く別物の感じがする。廊下から、他人の家みたいに入りづらい。

「ほら」

と太田保は顔で教室内を指す。太田保にしたがって教室を覗いて見ると、放課後のせいか誰もいない。誰もいない教室は不気味だ。掲示物とかウチのクラスと違ってちゃんと貼ってある。

「あ」

教室内を見まわしてと、あるものを見つけ思わず声が出た。ドラマや漫画でしか見たことのない光景。窓側一番後ろの机の上に花瓶。それが小林さんの席だとすぐにわかった。

うわ、本当にイジメだ。しかも典型的。教科書通りのイジメだ。ザ・イジメだ。ああ、ジ・イジメか。母音だから。

「なにあれ」

僕は大久保を見る。大久保は苦笑いのような、なんて言っていないかわからない表情をしている。同じ状況なら僕も見たいものを見てもよかったような苦い顔ではなく、同じ表情をしていると思う。

「まあ、イジメだよ、てか知らなかったの？」

「うん、えー」

イジメか。小林さんイジメられてるのか。あ、だから濡れていたのか。よくあるイジメのやつだ。トイレの個室にいたら上から水がバアアってなるやつ。そうか。なんとも言えない気持ちだ。味のないガムを噛み続けて吐きそうになるのと似ている。誰も教室にいないので、そのままに入ってみる。机に近づいたからって何も変わらないし、何もわからない。でもよく見ておきたかった。何で花瓶が置かれたのか、とか考えてしまう。答えなんて知らないけど。

大久保も着いてきたが、何をしていたかわからない感じだ。僕も何をしていかかわらないのでふと窓を見た。あ、屋上が見える。彼女はもしかしたらずっと屋上を見ていたのかもしれない。僕だったら見ている。たぶん。きつと。

今日はたくさんアキとメールをしていた。いつもの1・5倍はしている。いつもが多いから、もう大量だ。なぜかわからないがアキに無性に会いたくなっていた。

『退屈な日々が続くよーなにしたんだろ』返信。なにもしないでいいんじゃない？ 『それだと自分がどんどん腐ってゆく』返信。そっかー 『しん君はなにやってるの？』返信。なんも、アキは？ 『なんも笑 同じだ』返信。ねえ、『ん？』返信。そろそろ会いたいかもしれない。『えー』返信。嫌ならしいや『嫌とかじゃないよ』返信。そうなの？ 『うん』返信。ありがとう 『なんで会いたいの？』返信。なんでって言われても『理由がないの？』返信。会ってみたい。『いつかね』返信。ん、いつかなんだ 『うん、いつか』

いつか、なんてこないことを知っているが、来てほしいと思ってる。来ないから待つかもしれない。

何で会いたいのだろうと思っただのか。いや単純に好きだから。顔を見たかった。空気を共有したかった。

僕は今待っている。屋上の前の扉で、アキではなく小林さんを、本当なら屋上にいたのだけれど、彼女が来るかと思うとやはり外には出られない。早く来ないかな。

本当ならここにアキが来てくれたらどんなに幸せか。時々考える。一緒に学生生活を過ごしていたら、と。こんなに呼吸をするようにメールのやり取りができる人なんていないのだから、ずっと話しているような気がする。今だったら一緒に屋上にいる。しかもずっと。それは幸せだな。時間を共有するのが一番うれしい。僕の時間だけではなく、彼女の時間も使える。24時間が48時間になる。48時間の密度で現実の時間は24時間だなんて、人生が濃い。ああ、もしかしたら濃いから恋なのかもしれない。濃い恋来い。全部同じ音。

「あの」

来た。小林さんだけ。生徒証の写真とほぼ変わらない女子が目の前にいる。案外早く来てくれた。これで僕の屋上生活が戻ってくる。

「はい。これ」

差し出す。彼女は差し出した手を見ていて受け取ろうとしない。

「ここに落としてから」

そう言っても受け取らない。なんでだよ。

「うん、」

無理やり渡してしまう。親戚が子どもにお金を渡す時みたいに握らせた。もしかしてこういう態度がいじめられるのかもしれないとためなことを考えてしまう。まじまじと小林さんを観察する。ブレザーから覗いている手首がとて白くて細い。もしかしたらリストカットの痕があるかもと、手首に目が行ってしまふ。顔を見る。暗い顔をしている。表情が見えない。それは表情がないのではなく、髪の毛が長く黒く重たく見えるため。でもよく髪の毛の間から見える顔はかわいい。アキには負けるけど、アキはかわいい。写メを見ると目はぱっちりだし。小林さんはどことなくミニシアター系の邦画に出てきそうな女優のような地味な顔をしている。

「小林さん、だよね？」

「あ、うん、ありがとう」

「あ、桐原です」

一応自己紹介をする。

「あ、はい」

会話終わる。これからどうしようか迷う。どうしよう。いつも僕は屋上のほうにいるが、今日はドアの前にいる。屋上に入れるわけにもいかない。たぶん自殺しそうだし。いや自殺しないかもしれないけど、いじめられている人が屋上に入りたがっている。もう自殺志願確定たる。あと屋上に僕以外の人入れたくない。僕の場所でもないのだけど。

しばしの沈黙。学校内なのにグラウンドの野球部の声が聞こえた。

「え、何組？」

知っているのに、この前見に行ったのにもかかわらず、この沈黙に耐えられないので聞いてしまう。いじめられていることも知っているけど言わない。言えない。言ったらためなことでくらくら僕でもわかる

「4組、」

小さな声。ここが静かだからなのと近くにいたので聞こえたくらいの小さな声。

「4組かー知ってる奴いないやー」

笑う。乾いた笑い。何もおもしろくないけど、間を埋めるため笑ってごまかして語尾も伸ばす。アホっぽく聞こえてどことなく明るい気分がする。

「何組なの？」

彼女の方からの質問だが、答えておしまいになる。もっと会話のキャッチボールをしたいが、良い答えが見つからない。メールなら、考える時間があるのに。どうしよう。

「1組」

普通に答えてしまい会話終わる。どうしよう。そうですか、見たいな返事もなく小林さんは自分の膝を見ている。僕も思わず、見てしまっ。傷はな
いみたいだ。

無理やり話題を繋げようと思えるが聞いてはいけない内容のことばかり浮かんでしまい何も言えない。一緒に屋上に出るわけにもいかない。出ても
何もしようがない。どうしよう。

沈黙が時間を長く感じさせている。

「いつもここにいるの？」

小林さんの方からの発言。小林さんも気づきにくいと思ったのかもしれない。ありがたい。これで会話をつづけて早くここから脱出したい。

「うん、結構な確立でいるかな、しよっちゆういるよ、ほら屋上に入れないよさ」

言葉が見つかり次第すぐに考えなしで声に出しているからかもしれないが早口になってしまっている。しかもなんとなく昔の少女漫画のよさうな、エ
セさわやかな言い回しになっている。しかし彼女からは返事はなく、下を向いてしまった。

言っではいけないことを言ってしまったのかもしれない。

しかし何が言っではいけないことなのかわからない。

携帯が震えた。震える音ですら今は聞こえてしまっ。多分アキだ。返信したいが目の前には気づきにくい状況。

「わたしもいても平気？」

「え、うん、いいよ」

「別に許可とかいらなくてしよ」

相手を怖がらせないために笑ってみる。

「そっ、」

とだけ言うと、頭を下げて背中を見せて階段を下りて見えなくなった。思わず言っではしまっが、ここっていうのは屋上ではなく、この踊り場のこ
とだよな。回りを見る。物置でしかなかった。僕はひとりて今日も屋上に出るのをやめた。もう屋上には行けないかもしれない。彼女がここにいるな
ら出入り姿を見られてしまっ。

しかも口が滑っってしまった、いいよなんて言っではしまっ。来るのか。どうしよう。もうわかんないし、考えたくもないから携帯を出す。やっぱり
アキからメールが来ていた。急いで返信をする。

返信。いじめられてる人と接触した。あと生徒証返した！ばくえらい！

メールを送って、携帯を閉じた。踊り場は埃っぽくくしゃみを何度か連続でした。その音が大きく響いた。やはりここはいつものように静かだ。

「ああ屋上に出たいなあ」

呟いてみた。小林さんの声より小さな声で。誰にも聞こえない。僕の声は聞こえなくて、届かない。

その次の日の放課後、僕はそこにいた。屋上には出ず、ドアの前に座っているだけ。小林さんはまだ来ていない。多分いじめられているのだろっ。

見に行く勇氣はないので持ってきた漫画を読むが、あんまり頭に入ってこない。どんないじめをされているのだろうかと考えてしまう。なので、携帯を開きメールを問い合わせると、メールが来た。もちろんアキ。なんとなくラッキーな気分がする。

『おはよ、』
僕が朝に送ったメールの返信だった。最近、メールがそっけなくなっている。最初はそんな気がするだけかと思っただけけれど、今は確信に近い。今日も素っ気ない。でも理由なんて怖くて聞けない。聞いたら終わる気がしたから。終わりがたくなかった。これが僕の生活の大部分を作っていたから。

返信を送信して携帯を閉じたら、小林さんが目の前にいた。何故かビニール傘を持って。

「なにそれ」

「ビニール傘」

「それはわかるけど」

彼女はビニール傘の意味を言わずドアに近づきノブに触れる。そして何度か回すが、いつもの通り鍵はかかったまま。それを確認すると傘を思い切り踏んで折った。

「えっ？」

思わず声が出る。

「手伝って」

手伝ってと言われても、何をしても、何をしても、何をしていいかわからず立ち上がり見ているだけ。何度も傘を踏む彼女、いじめられて、おかしくなったのかもしれない。正直怖い。恐ろしい光景。女子高生が傘をバキバキ踏んで折っている。いじめの暴力が連鎖をしているのかもしれない。

「よし」

そう言っただけで小林さんは踏むのをやめた。傘を見ると、折れに折れて、人間の骨ならもう修復不可能なくらいに粉々で、彼女はそこから柄の部分から押すと開くボタンの部品を取り出した。

「えっ？なにをするの？」

僕はたまらず聞く。何をしているのか謎過ぎて、全くわからない。すると彼女はビニール傘から取り出した押しボタン部品を見せて、
「これで鍵を開けるから」
と笑った。

「それ自転車の鍵開ける時に使うやつでしょ」

「え？開かないの？」

僕は笑ってしまった。彼女の真剣な顔に。

「うんそうだよ、自転車の鍵とドアの鍵が一緒のわけないじゃん」

「そっか」

彼女は粉々のビニール傘を蹴った。階段から落ちて骨組みとビニールが別れた。

「入りたいの？屋上に」

「うん」

ぼろぼろになった傘を一時見た。まるで死体みたいだと思った。傘の死骸なのは間違いないのだけれど。

「なんで」

「死にたいから」

わかっていたのに、予想はしていたのに、心臓を直接刺されたように心臓が痛んだ。傘の死骸を見つめてしまう。それが人の死骸を想像させる。

「なんで」

「え、知らないの？わたしいじめられてるの」

「だからって」

知っているが知らないことにした。それが正解だと思ったからだ。ポケットに手を入れて鍵を強く握った。鍵は冷たかった。僕が何も言わなかった心のように。僕は彼女の死にたいという希望に何も言えなかった。合鍵の存在を隠すことしかできない。いじめなんて止められない。僕は何もできない。

彼女は自殺を求めている。僕は何も言えなかった。やめなよの一言も。上辺だけで作った言葉すら吐けない。僕はなんで彼女と関わったのだろう。考えてもわからなかった。

その日から僕は踊り場には行かなくなった。彼女は行っていたみたいで、階段を降りてくる彼女を時々見た。そこで会話を交わすことはなかった。いじめられている姿も見た。何回も。しかし止めには行けず、頭では行くべきだとわかっているのに足が地面と釘で打ち付けられたように動かなくて汗をかいただけだった。見て見ぬふりをしているだけ。みんなと同じ傍観者になっていた。

彼女は死のうとしていた。屋上の鍵を開けようとしている。開いたら飛び降りるのだろう。しかしまだ生きている。屋上のドアは開かない。彼女が死んだら僕はなんて思うだろう。あの時止めておけばと、月並みな後悔をするだけだろう。考えるだけ。何もできない。何もしない。でも思っただけはマイナスの方へ進んでしまう。後味の悪いことしか思いつかない。それなのに僕は何もできない。

そんな思考ではアキとは朝の挨拶のやり取りしかなくなってしまった。僕もそれ以上メールすることはなくなっていた。現実が忙しいのかもしれない。僕もアキも。

久々に屋上に行こうと思った。そこなら考えられると思った。しかし何を考えていいかささわわからない。でも何か良い考えが浮かぶと思った。僕は毎日彼女を気にしてしまっていた。階段を上がっていくいつもの場所に人影。間違いなく彼女だ。今日もいた。

「よ」

冷静かつ無関心を装って声をかけてみた。小林さんはドアノブをそこから屋上が見えるみたいに顔を近づけて覗きこんでいた。

「なにやってるの？」

彼女はこつちを向いて手に持っていた針金を見せた。

まだ飛び降り自殺を諦めていなかったのか。いじめられていた彼女の姿を思い出す。思い出したくないのに浮かんでいく。

「なんでさ、」

言葉が詰まる。勢いで聞いてしまいそうになったのを飲み込んだ。

「ん？屋上にただ出てみたいだけ」

思っていたことと違うことを言われて、思っていた言葉が声になってしまう。

「ちがくて、なんでいじめられてんの」

思わず言ってしまった、だんだん声小さくなってしまった。聞こえていない方がいいのにと後悔したが、彼女にはちゃんと聞こえていたらしく俯いてしまった。言わなければよかったのに。でも僕は聞きたかった。聞いてみたかった。それから何か考えられそうだから。

沈黙。

僕も初めて会った時みたいに話題を探しはしない。

「んーとね、」

うんと言っ意味を込めて声を出さず頷いた。何も喋りたくない。今は彼女の言葉だけを受けとりたかった。

「わかんないんだよね、」

小林が言った。こっちはもつとわからないのに。

「なんでかもわからないし、いつからかもわかんないし、ユキちゃん、あ、わたしのこと、まあ、いじめてる子なんだけど、ユキちゃんに彼氏ができたからかな、それから、ね、」

小林は苦笑いしながら言っている。

想像だけど男が女の友情に嫉妬したのかもしれない。だから、ユキちゃんは彼氏のこと好きだから、彼氏の言いなりでいじめたのかも、と思ったが違う。すぐに小林さんをはじめた時の彼女の表情を思い出した。嫌で嫌ではない苦痛な顔ではなくただ純粹に楽しんでいた表情だった。

「なんで、嫌とか言わないの？」

「わかんない、ずっと友達だったから」

「え？」

「なんか元通りにならないかなって」

「なんないよ」

「わかんないよ、」

僕は彼女がわかんなかった。なんでそこまできている相手を信じているのか。わからない。

「実は屋上開けられるでしょ」

え？思わず顔を見るがさつきと変わらない。笑っているのか悲しんでいるのかわからない曖昧な表情だった。

「え？」

「知ってるよ」

「え？」

「今日は帰る」

小林は階段を下りて消えた。彼女みたいな発言を残して。僕はそこで一人考えた。なんで小林が、屋上の合鍵を持っていることを知っているのか。でも答えなんて出てこなかった。わからないままだった。

次の日。なんで知っているのだろうかとまだ考えていた。今日は、彼女はいなかった。いないのを確認して屋上に久しぶりにきた。季節のせいかな風に運ばれた枯れ葉が多く、いつもの光景とは少し違ったのと、久々なので新鮮な気持ちだった。なんで彼女はいじめを受け入れているのかわからなかった。考えても考えても、小林の思考がわからなかった。風が冷たい。久々に感じる直接の風は強くて冷たい。

彼女は自殺しようとしていた。

受け入れてるわけではないのか。

なんでだろうと考えた。今日は、彼女はいなかった。いないのを確認して屋上に久しぶりにきた。季節のせいかな風に運ばれた枯れ葉が多く、いつもの光景とは少し違ったのと、久々なので、新鮮な気持ちだった。なんで彼女はいじめを受け入れているのかわからなかった。考えても考えても、小林の思考がわからなかった。風が吹いた。久々に感じる直接の風は強くて冷たい。彼女はここで自殺しようとしていた。受け入れているわけではないと気づく。そうじゃん。死にたがっているのに受け入れているふりか。じゃあ、

じゃあ？

そこで僕が今できることを考える。何が出来るか。浮かんではいるけど、勇気がない。座っているのに、足がすぐむきかす。想像ですら全く動けない。いじめなんて止められない。考えれば考えるだけ、自分が何もできないことを知って落ち込む。もうすでに落ち込んできている。だから今日はもう帰ることにした。階段を降りたら、廊下に小林がいた。おお、と声をかけようと思ったら、いじめられている最中のようで、女子2人と男子2人に言い寄られていた。僕はすぐに隠れる場所を探して隠れて、現場を監視。心臓が高鳴る。嫌な高鳴り。

「なんで喋らないんだよ、」

と男子A。怒っているというか、嘲笑っているような言い方。

「ねえ、なんで私たちをイライラさせるの？」

女子A。髪の毛が茶色で腕組みをしながら小林をにらんでいる。これがもしかしてユキさんかもしれない。もう1人いるから2分の1の確率。小林を見ると彼女はいつも会うときには見たことのない表情で俯いている。初めて出会った時のよう。俯いているせいで影が表情を隠しているだけではなく、無表情のせいで表情が読めない。

暗い顔。全く小林のことを知らない人が見てもこれは何か重大な悩みを抱えているなと思ってしまう。少しでも小林と関わった僕ならと考えたら、一歩だけ足が動いた。声がよく聞こえる。女子一人に「喋れよ」「無視すんな」と言われながらローキックされている。そんなことされたら細い太ももが赤く腫れてしまう。近づく。歩くスピードは遅いが一歩一歩、いじめの現場に近づく。心臓はもうこのリズムではギターを弾くのは無理！というくらい早くなっている。近づいて気づいた。男子の一人は去年同じクラスだった奴だ。

「おおしんやじゃん」

髪の毛をライオンみたいにして、田中が僕に気づく。

「おお、」

田中がもしかして上原の彼氏なのか。

「なにやっつてんの？」

視点は一点しか見つめていないなか、言ってしまう。

「え？」

田中が言葉に詰まる。ここで言葉を間違えたら、他の3人にいじめを止めに来てきたいい子ちゃんと認識されてしまう。そうじゃない。僕の目的は違う。いい子ちゃんに見られたいのではない。ふと女子二人を見たら今までに見たことのないような表情で僕を睨んでいた。女子ってこんな怖い目できるのか。人を殺す視線だ。

「遊んでんだよ、」

笑いながら田中が言った。僕はその笑いへ返事とはかりに声なく笑った。

「おー遊んでんだ」

おうむ返し。なんて言えはいいんだろ。迷う。考える。思考。思考。

「てか土屋見なかった？」

背中には冷たい汗。土屋は2年の学年主任。いじめの現場を見られたら大変なことになるのはこいつらにでもわかるはず。

「なんで？見てないけど、なに？なんかあんの？」

田中が明らかに焦っているのがわかる。他の3人を見る余裕はない。

「そっかー、教室に呼び出されてんだけどなあ」

わざとらしくなく言うことだけを考えながら言っつてこの現場から脱出する。

「じゃー」

いじめの現場の真ん中を突っ切り自分の教室へ向かう。もちろん土屋はいないし来る予定もない。誰もいない教室へ入る。一回も後ろを見なかった。見たら気にしていると思われてしまう。教室の窓側へ行く。大きく息を吐く。これで今日のいじめは終わったかも。学年主任がそこを通るとしたら、もういじめはやめるだろう。よかった。身体中の空気を全て出すくらいに吐き出した。そして窓側の誰のかわからない机の上に座り寝転がる。机の面積に対して体が足りないのが重量に負け地面に体が引つ張られ反った状態になる。すぐに頭が痛くなり、起き上がった。その勢いで機が落ちた。それを机の上から拾おうとしたが取れず、降りて機を取って開いた。久々に長いメールをアキに送ることにした。机の上に再び座り、考える。長々さつきまでの出来事を書いて送る。それでようやく落ち着いた気がした。

すぐに返信があった。もちろんアキだ。

「すごいね、なんかすごいや、大人になったね、いいこいいこ」

うれしくなった。笑みが自然とこぼれる。いいこいいこされた。

「今度会おうっかー。私も忙しくなくなったし」

「やった！」

「やった！」

教室内で僕の声が響く。やった。アキに会える。頑張った甲斐があった。アキに会える。色んな想像をする。会ってデートしている僕ら。手を繋ぐ僕ら。キスをする僕とアキ。

深呼吸をする。何度も息を吐き吸う。

ああ落ち着いてきた。思考が鮮明になる。そうだアキより問題は今日のいじめだ。アキに思考を取られていた。今日のいじめがなくなったからって明日はどうしよう。さすがに2日連続で邪魔したらためだろう。でも本当に今日のいじめは回避できているだろうか。ただ土屋がここを通るだけならじゃあ違う場所でいじめようぜってなるかもしれない。そうだ。机から降りる。教室を出てみるが、誰もいない。どうしよう。違う場所でいじめられているんだ。もしかししたら、僕のせいで、なんだよ仲間増やしたのかよとか言われて、よりひどい仕打ちにあっているかもしれない。どうしよう。わからないので、とりあえず屋上へ向かう。

するといつもの場所で彼女はいた。さっきとは違う顔だった。暗い顔の小林とは別人。その表情を見ただけと安心してしまふ。いつもの小林だ。まあそんないつものというくらい彼女を見ていないけれど。さっきまでいじめられていたのに、安心してしまふ。

「あ、来た」

「余計なことしたかも、ごめん」

「ううん、ありがと」

「もうさ、反抗しちやえよ」

今自分が思ったことだった。早くいじめを終わらせる必殺技。そうすれば、僕はその足かせをはずして、笑顔でアキに会える。アキに会う時にいじめなくなったのと聞かれて言葉に詰まりたくない。アキに褒められたい。アキにすごいと言われたい。アキに好かれたい。だからそのまま思ったことをそのまま声にしてしまふ。何か僕のを止めていたストッパーが外れたみたいだ。

「え？」

「だからもう反抗しちやえって、いじめに負けんよ、もう、意味わからんわ、暗い顔見んのも嫌だしさ、罪悪感だらけだし」

「え、どうしたの急に」

もう終わりだった。僕は小林の話からアキの話に行きたかった。

「なあ、反抗しろよ」

「わかんないよ、無理だよ」

「一回でもしてみろって、そしたら一緒に屋上行こうぜ」

沈黙の後、頷いて小林は階段を下りて行った。

余計なことを言ってしまったかもしれない。アキのことが思考を埋めてなげやりになってしまった。後悔。屋上の中入ろうぜって言ってしまったし。

ああ、そうか知っているのか。なんで知っているのだろう。携帯が震えた。開く。新着メールの表示。慣れた手付きでメールを見る。

アキからだった。

『来週会おうか』

会いたい返信はすぐにできなかった。まずは声なくガッツポーズ。今度会おうから具体的な日時が来た。現実だ。さっきまでの小林のことは忘れた。小林について頑張ったから、ご褒美だ。ご褒美を神様がくれたんだ。よし。返信を考える。いつもならすぐに返信だが、このメールではすぐに返信したらとても会いたいと思われる。だから少し時間をおく。送った。会える。よし。うれしくてずっと屋上の前の踊り場にいたこと忘れていた。ここを楽園かと思ってしまう。階段を2段飛ばして降りる。帰り道で詳しく会う日時を決める。もう幸せだ。アキに会える。アキに会える。帰り道が早く感じる。あれもう家の近くだ。まだメールが終わっていない。なんだか家に帰ったら、メールが途切れる気がして遠回りをして帰った。

1番好きな人に会えるかもしれない。そう考えたら毎日が遅くなった。会うのは1週間後で、その1週間が僕の今までの人生より長く感じた。僕は待っている。待ち合わせ場所は駅前だった。ベンチに座って携帯をいじる。時間がすぎるのを待つ。待つ。まだ待ち合わせ時刻ではない。30分も早く着いた。30分待つ。この1週間に比べたら何分の1時間なのに同じくらい感覚。時計を見ても針は動かない。動かないからどうしようもない。待つ。

人の流れを目で追う。もしかしたらその中にアキがいるかもしれない。かわいい子を探す。携帯を開きアキからもらった写メを見る。やっぱりかわいい。この人が僕の目の前で動くのか。そんなことを考えると緊張してくる。しかし昨日が緊張の頂点だったから、今は喜びの方が大きい。待ち合わせ時刻だ。来ない。いやまだ待ち合わせ時刻ちょうどに来るなんて、どっかで待っていたにちがいないと思ってしまうからちよほどには来ないだろう。来たら逆にえーとか少し怖じ気付いてしまかもしれない。

そして、

そして？

アキは来なかった。計8時間待っていた。いろんなことを考えた。事件に巻き込まれたとか電車が止まったからとか、携帯で何度も電車やニュースについて調べたがどこか違い知らない電車が止まったという情報と、芸能人が結婚したという情報しかなかった。近所で事件は起きていないし、電車は止まっていない。じゃあなんで彼女は来ないのだろう。

メールを送った。30分待った時に。それとなくどうしたの？という感じのメールを。しかし返信は来なかった。連続して送るのは相手に恐怖を与え、僕が必死だとはれてしまう。だからメールはしない。返信は来ない。待った。また来ない。アキもメールも。またメールを送った。

泣きそうになる。世界で僕だけが生きていると勘違いしそうになっている。絶望。返信は来なかった。雨が降っていた。いや降っていないかった。僕の心の中だけで降っていただけだった。心臓に送る血液が逆流しているような感覚。眼前がぼやけていく。

携帯が震える。急いで携帯を開く。待ち合わせ時刻から7時間経っていた。待っててよかった。新着メール1件。見る。アキだ。ただ一言。

『ばーか』

血液が流れを止めた。感情が落ちた気がした。宇宙に放たれた死体の感情のように僕の全てが無になる。疑問はなかった。考えることさえわからなかった。書かれている文章がよく読めない、読めても理解ができない。どういうこと。返信をしてみた。

返信は送った直後すぐ来た。宛先不明の自動返信だった。メールアドレスが僕と彼女を繋ぐ唯一の物だったのに、なくなった。僕の携帯に彼女の昔のアドレスと過去のメール、そして何枚かの顔の写メが残っただけだった。それ以外に何も知らなかった。本当にアキはアキなのかさえ、もう知ることとはできない。僕は見えない場所で見えない相手とキヤツチボールをしていただけだった。それなのに僕は彼女と相性が合うと思いい、いつの間にか見えないのに好きになっていった。姿が見えないのに好きになる、ということが出会って知り合っただけに恋に落ちるより特別なものと思いついてきた。携帯を壊したくなった。しかしその前に僕が壊れていた。僕の支えになっていたものは僕だけにしか見ることができない幻だった。僕は終わったんだ。僕は、

次の日、僕は学校を休んだ。しかし学校にいた。屋上にいた。風もない、いや吹いているのかもしれない。だけど僕には感じない。携帯も見えないから今が何時かわからない。でも声が聞こえないから放課後ではない。一体どのくらいここにいるのだろう。ずっと立っている。いきなりものすごい風が僕に吹き、そのまま飛ばされてここから落ちてしまわないかをずっと考えている。落ちたい。けれど勇気がなかった。僕は屋上の真ん中にいた。いつ勇気が出るのだろう。もう震えない携帯がポケットの中にある。昨日帰った後、アキとのメールを全て消した。写メも、登録も、これで僕の知っているアキは死んだ。なのに僕は生きている。心の中にアキが生きている。早く死ねよ、消えろよと考えるが消えない。ずっと残ってしまった。アキのいない僕は生きていく意味があるのだろうか。そうか僕が消えたら、アキも消える。そうだよ、そう思うと少しずつ歩き出した。もう僕はなくてもいいんじゃないか。あんなに悩みを相談したり、息を吐くように話した相手はいない。しかもそれは虚像だった。僕はただ遊ばれただけだった。消えたら全部終わる。死んだら終わることができる。

ゆっくりと歩く。

屋上は普段鍵がかかっているから自殺者のことを考えての柵もない。ゆっくり進んでいけば、簡単に落ちることが出来る。もうあと数歩で中庭までまっ逆さまになる所まで来た。下を見る。ここから落ちれば死ぬだろう。確実に。教室が見える。多分同じ学年のどこかのクラスだ。目を細めると、小さく花瓶らしきものが見えた。

ああ小林のクラスか。小林元気かなあ、死んだら笑うだろうか、お前が死ぬんかい！ってな具合に。するとちやうどいじめられている最中のようだ。ここからでも見える。ふと小林がこっちを見た。目が合った気がした。見られてはいけないとこを見られたので隠れる。一瞬経った後、覗いてみると、小林がいじめている奴らに花瓶を投げている瞬間だった。窓から見える範囲の生徒が全員止まっていた。花瓶は割れたかどうか確認できない。反抗した。あいつ反抗しやがった。自然とにやける。表情なんてなくしたと思つたのに。小林以外の生徒が一時停止している中、小林はこっちをちらっと見た後、走り出した。こっちに来るのかもしれない。僕が見えたのかもしれない。どうしよう。隠れようと屋上を見回すが何も隠れる場所がない。ああ、もう。

ドアが開いた。小林だった。

「久しぶり」

息を切らし、肩で息をしながら彼女は言った。

「ああ」

とだけ返事。

「なにやってんの」

彼女は怒っている。怒った顔かわいいなあ。なんだよ、怒れるじゃん。早くそうやって怒って、反抗したらいじめもすぐ終わったのに。

「いやあ別に」

笑って言ってみる。

「別にじゃないでしょ」

厳しい声。先生に怒られた時のように笑顔を止める。

「うん」

自殺しようとした。とは言わなかった。

「死のうとしてたでしょ？」

目が泳いでしまう。なんで気づいたのだろう。昨日のことなんて一回も話してない。誰にも話していない。

「地味にさよならしようと思っただけ」

「無理だよ、死ぬなよ、何があったか知らないけど」

「まあ言わないけど」

「言いなよ」

初めて聞く小林の涙声。いつも平坦な彼女の声が崩れている。なんで泣くんだよ。

「地味にいなくなろうかと思っただけさあ、もう、小林来ちゃってどうすんだよ」

「私の方がどうすんだよ、自殺するって思っただけでいじめてる奴らに反抗しちやっただけさ、どうすんだよ、あんたのせいだよ」

必死な声。いつもの小林のゆったりした速度の声ではなく、早口だった。こんな早く話せるのかよ。あんたのせいという言葉がひっかかる。

「どうしような、」

僕は天を仰ぐ。今日雲一つない、いい天気。走ってきたせいで小林の髪の毛が乱れて、顔が見える。かわいい顔だ。今は必死で僕を見つめている。

「自殺すんなよ、」

強い声。今日は初めて見る小林だらけだ。自殺しようとしていたお前が言うなよと笑いそうになる。いや我慢していたけど表情に出たかもしれない。

「お前が言うなし」

「じゃあ、」

「ん？」

「何があったのかだけ教えてよ」

「何があつたんだろう。考える。笑いが止まらなくなりそうだ。地味にさよならされたの、僕。好きだったかもしれない人に。そう考えると僕馬鹿だ。すげえ馬鹿だ。ああ、もう何で落ち込んでいたんだろう。あーもう誰かに伝えたいって人がいなくなって落ち込んでいただけで、誰にも理由を言わず地味に死のうとしていたなんて笑い話にしかない。伝えたい人はいるじゃんか目の前に。まだ好きとかはわからんけど。」

「じゃあさ、」

交換条件を出そう。そして、小林のいじめもどうにかしよう。もう小林は1人じゃないし。1度死のうとした僕に怖いものはない。もしかして今はだけかもしれないけど。いじめている奴1人知り合いだし。なんとかなるかもしれない。

「なに」

「学校が舞台の青春漫画では、よく屋上が出てくる。その理由はなんだったと思う」

「答えがでたら吹っ切れる気がした。アキを忘れられるような気がした。全部かもしれないけど、何か屋上のことがわかれば、何か変わる。そう思った。」

「机とか書くのが面倒だから？」

「あつげにとられた。突拍子もないことを言われたのかよくわからない。面倒だから、え。どういふことだ。」

「え？」

「教室だと机たくさん書くの面倒だし」

「ああ」

納得。答え出ちゃった。答えわかっちゃった。しかもそれ面倒って。まあそうだよな。そうかあ。面倒だもんな。書くの。屋上は楽だしな。そうか青春が屋上というわけではないのか。小林を見つめる。小林も僕を見ている。

「ねえ、どうすんの」

「わかんない」

「やだ」

初めて感情を見た気がした。かわいい顔している。僕は笑顔になる。もう死ぬ気はない。余裕も出てきた。

「じゃあさ、携帯のアドレス教えて、あと下の名前も」

「名前が生徒手帳を見た時に知ってはいたが聞いてみる。これから何かを始める。何もない屋上から。そこから何かを始めよう。」

「え？」

小林あかりが困った顔をしている。僕が何を言っているかわからないのだろう。僕だってわからない。ただ一歩進みたかった。屋上では強い風が吹いている。空には雲と太陽。そして背中には強く当たっている光。じつと。

地味なグッバイ

<http://p.booklog.jp/book/40156>

著者 : cm-journey

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/cm-journey/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40156>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40156>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.